

プロローグ

生徒会長に指名されたとき、息が止まりそうだった。

ただただ予想していかないことで、心の準備なんてできていなかった。それは私だけじゃなく、その場にいた全員が同じで、いつもは静かに粛々と会議が進む生徒会室が、一気に騒がしくなった。

当事者である私が取り乱してはいけないという思いで、なんとか表情を変えないでいた。

そして私を指さした会長が、いつもの笑顔を浮かべていた。何を考えているかわからない、薄ら笑い。この笑顔にずっと振り回されてきたけど、このときばかりは反抗の声さえあげられなかった。

誰もが落ち着きをなくした会議室が、副会長の「ご静粛に！」という一喝でまたいつもの静けさを取り戻した。

数字の『0』の形をしている会議テーブルに座っている二十数名あまりの役員の視線が、一斉に私に向けられた。みんな、私が何を言うか待っていた。

ちようど、会長と対面に座っていた私は、ゆっくりと椅子から立ち上がった。

そして数秒、まだ笑顔を浮かべている会長と向き合ったあと、ゆっくりと作法通りのお辞儀をし、ごくりと唾を飲みこんだ。

「ありがとうございます。——力の限り、頑張らせていただきます」

その答えはつまり『承諾』だった。もともと拒否なんてありえないから、そう言うしかなかったけど。

それでも会議室は静かなままだった。ただ、副会長が立ち上がって私に向かって無言で拍手をくれたのがきっかけで、ほかの役員たちも戸惑いながらも同じように拍手をした。

次期生徒会長が私だと正式に決まった瞬間だった。

私は彼女らに向かって、ありがとうございますとお礼を言いながら、また頭を下げた。

「じゃあ、染井佳乃くん。この学園を頼んだよ」

拍手がまだ鳴り止まない中、会長が私に向かってそうウインクをした。そんな彼女に向かって「はい」と答えたとき、目が合ってしまった。

ほぼ全員が立ち上がって拍手をする中、ただ一人座ったまま、肩を震わせて、私を睨みつけている同級生の彼女と。あの憎しみで染まった顔を、私はきつと忘れることができない。

第一章【生徒会桜戦争】

《第一週目・月曜日》

目覚ましをかけた時間より五分早く、自然と目が覚めた。まだ重たい頭のまま、ベッドから抜け出して、白いカーテンを勢いよく開けた。

気持ちのいい朝日が一気に室内に差し込んで来て、眼を細くしてしまふ。ただ、そのおかげで眠気が消えていく。今度は窓を開けて、風を全身に浴びた。こうして深呼吸をすると、今日も一日頑張ろうという気持ちになれる。壁に掛けてあった制服をハンガーごと手に取った。

春夏用の白いレースのパジャマを素早く脱ぎ、その制服に袖を通す。スカートを穿いて、きゅっと胸元の赤い紐のリボンを結んだ。ちようどその時に目覚ましが鳴ったので、すぐにそれをとめた。

洗面所で顔を洗い、櫛で髪をとかした。

これでやっと、一日の身支度が整った。

「楓、そろそろ起きなさい」

さつきまで自分が眠っていたベッドの二階に向かって、そう声をかけると「ううー」という、弱弱しい声が聞こえてきた。やれやれと思いつながら、ベッドの梯子を上って、上段で眠っている彼女にまた呼びかける。

「楓、聞いていますか」

「き、きいてますう」

部屋に入ってきた朝日を避けるように顔を布団で隠した楓が、明らかに寝起きの声でそう答える。

「私は先に出ますからね。いいですか、遅刻なんてしたら承知しませんよ」

布団の上から彼女を弱く叩いて、梯子から降りようとしたところで、楓が布団から顔を出した。

黒くてきれいなショートボブが、今は所々はねてしまっている。まだとろんとした目をしていて、それでも私に笑顔を向ける。

「おねーさま、いつてきますのチューなど」

「バカを言つてないで早く起きなさい。遅刻なんてしたら許しませんからね」

こんなやりとりを毎朝繰り返しているのに、楓は「そんなつ」とシヨックを受けていた。呆れて相手をする気もなくなったので、私は梯子から降りて自分の鞆を手にとった。

「行つてきますね。またお昼に会いましょう」

最後にその声をかけて、私は寮の部屋を出た。

両手で鞆を持ち、姿勢よく背筋を伸ばして歩くことを意識しながら、寮の中を進んでいく。まだ早めの時間なので、ほかの生徒とはまだすれ違わない。でも、朝だからといってだらしない姿を見せるわけにはいかない。

寮のげた箱で靴に履き替え、外に出て、校舎までの道のりを歩いていく。空は所々に薄い雲があるものの、ほぼほぼ晴天で、ただそこにいるだけで気持ちよかった。

寮から歩いて数分で、校舎についた。

私の通う、私立華月女子高等学校。あと二年で創立一二〇年を迎えるほどの歴史を持つ、県内で有数の進学校。

それだけなら聞こえはいいものの、よく言われるのは『お嬢様学校』というレッテル。

三メートルはあろうかという校門の前まで来ると、さすがに色んな生徒と会うようになった。彼女たちは私を見かけると、パツと顔を明るくした。

「染井会長、おはようございます」

「ええ、おはよう。今日もいい天気ね」

数多くの生徒とそんな朝の挨拶をしながら、校舎へと入っていった。

もう二学期で、生徒会長に就任してから夏休みを挟んだとはいえ五か月になるというのに、まだ挨拶をされるといふ立場に慣れない。二年生のときまでは挨拶はする側で、それに慣れていたので、控えるようにしている。

ただ、立场上、私から挨拶してしまうと下級生が委縮してしまうことが多いので、控えるようにしている。

「染井会長、今日もお綺麗ですね」

「ありがとう。あなたも素敵よ」

こんなやりとりも毎朝ある。やはり、みんな出自がしつかりしているからか、朝の挨拶は本当に丁寧だ。ふいに、隣に誰かが並んだ。横目をやると、私より頭一つ分ほど長身で、地毛の薄い茶髪を耳まで伸ばしたショートカットの見慣れた顔がいた。

剣道部の主将でもある彼女は、背中に竹刀を携えていた。

「おはよう、我が姫様」

「……おはよう、凧」

ウインクする顔は、同性でも嫉妬してしまいそうになるほど整っていた。

入学した時から一緒にいるクラスメイトの雪屋凧。長身に短髪、そしてとても中性的な顔立ち。そんな見た目だから制服を着ていないときはよく男性だと勘違いされる。ただ、だからこそ、この女子校で彼女のファンは多い。

「なんだか冷たい挨拶だね」

「その呼び方は好きじゃないわ」

「生徒会長と呼ばばいいのかい」

「まだそっちのが良いわ」

「僕は他人行儀で好きじゃないな」

「あなたがそんなことをどこでも考えずに言うから、あらぬ噂がたつのよ」

ふと周りを見渡すと、私たちが並んで歩く姿を見ながら、口元を隠して何かヒソヒソと話す生徒が何人かいた。

「僕と君が付き合ってるって話か。嬉しくないかい？」

「私の立場を考えてよね、もう」

そうため息をつくくと、いやいやと凧は首を左右に振った。

「十二分にそれは考えてるさ。だからこそ、今朝も奔走してたんだよ」

凧のその言葉に私は思わず足を止めた。ただ、他の生徒に怪しまれないよう、また歩き出して小声で話を続ける。

「また、例の件？ あなたって人は」

「君が積極的に動かないから僕がやってるんだ。いいかい姫様、弥江は本気だよ。彼女は本当に君を潰しにきてるんだ」

「……わかってるわ」

「なら——」

階段を上り終えて、角を曲がったところで、私と風は自然と会話を止めてしまった。

私たちの教室の前で、人だかりができていた。まだ朝も早めの時間なのに、かなりの生徒が集まっていて驚いてしまった。そして集まっていた彼女たちが私と風を見て、自然と道を開けると、その先にいる人物が目に入った。

「弥江さん……」

人だかりの中心にいたのは、一人の女子生徒だった。光沢のある艶やかな黒髪を腰まで伸ばし、そこに一切の乱れがない。少し尖った目つきが、彼女の性格をよく表しているように見える。

腕に『風紀員』という腕章をつけていた。

生徒会の副会長、弥江咲良さんが教室の扉に背を預けていた。ただ、私と目が合うとすぐに姿勢を正した。

そして、両手でスカートの裾を少しだけつまみあげるカーテシーの挨拶をしてきた。

「染井さん、ごきげんよう」

とても優雅な、そして気品のある挨拶の仕方。彼女以外がやれば、ふざけているようにしか見えないかもしれない。

財閥の令嬢にして、現役閣僚の一人娘。この『お嬢様学校』においても、間違いなくトップの出自を持つ彼女だからこそ、絵になる挨拶だった。

私は生徒たちの間を通っていき、彼女の前でお辞儀で挨拶をした。

「おはようございます、弥江さん」

お互いになまっすぐ向き合い、笑みを浮かべた。

「来るなら先に言っておいてくれ。場所と時間は用意するよ、副会長様。君みたいな有名人がそんなところに陣取っているから、クラスメイトが困惑してる」

私の後方にできた人並みの最前列にいた風が、明らかに敵意を剥き出しにして、弥江さんに苦言を呈した。

「風、挨拶くらいなさい」

「君ってまじめすぎない？」

「礼儀作法の基本よ」

そんな私たちの小競り合いを、弥江さんは「クスッ」と笑った。

「構いませんよ、染井さん。あなたのナイト様の言うことももつともですから」

弥江さんの余裕のある対応に、凧は不快そうな表情をした。それを見ていた周りの生徒が、状況がかなり穏やかでないことを悟り、少しざわつきはじめる。

これはよくないとわかりつつ、どうすることもできなかった。周囲の生徒たちを無理やり解散させたところで、あらぬ噂がたった。でもそも……そんなことを、弥江さんがさせてくれるわけがない。

「凧、私が話をしているから少し静かにしてて」

そう釘をさすと、彼女は納得している表情ではなかったけど、一歩だけ引きさがあった。

「弥江さん、何か御用があるなら凧の言うとおりに、別途時間をとりますが」

「お優しいお心遣いに感謝いたします。ですが、私も生徒会役員、あなた様のご多忙なことは承知しております。用はありますが、特別なお時間などいただくわけにはいきません」

なるほど、この場を引く気はないようですね。

鞆を握る手に汗をかいていることが、自分でよくわかる。明らかに、弥江さんはある目的を持って、ここに来ていて、それは私にとって良くないことだった。

いつかこういう日が来るとはわかっていたし、だからこそ凧が色々根回しをしてくれていたけど、やっぱりこの日が来てしまったかという、沈痛な気持ちになる。

「そうですか。では、廊下ではありませんが、ご用件をお伺いしましょう」

気持ちを悟られないように、努めて平静に、私は覚悟を決めた。

弥江さんはその言葉にっこりと笑った。

「染井さん」

そして細くて白い右手の人差し指を、まっすぐと私につきつけた。

「あなたに、宣戦布告をいたします」